

知ってください！子どもの権利

いよいよこの4月から、日本ではじめて、子どもの権利を大切にしようという「こども基本法」が施行されます。この法律は、日本国憲法や「子どもの権利条約」(※1)の精神にのっとり、「すべてのこども(※2)が自立した個人として、ひとしく健やかに成長」することができ、その「権利が守られ将来にわたって幸福な生活が送れる社会」をめざしています。

また、子どもや若者、子育てに関する施策をすすめる「こども家庭庁」という国の役所も新しく発足し、さらなるいじめ防止対策も進められます。

世界には、戦争で家族を失った子ども、貧しくて食べるのも困っていたり、働かされたりしている子どもがたくさんいます。いじめや虐待、学校に行きたくても行けないなど、いろいろなことで悩み苦しんでいる子どもが増えていることも大きな課題となっています。子どもを取り巻く状況や環境は大変厳しいものがあります。「子どもの権利条約」は、①命を守られ成長できること ②子どもにとって最もよいこと ③意見を表明し参加できること ④差別のないことを4本柱として、大きく4つの「子どもの権利」を定めています。

国際的な子ども支援団体(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)の調査(2019年)によれば、「子どもの権利条約の内容を知っている」と答えた大人は、なんと**16.4%**でした。



生きる権利



育つ権利



守られる権利



参加する権利

(日本ユニセフ協会のHPより)

いじめは、明らかに子どもの人権を侵害する行為であり、時として犯罪行為にもなります。大人は子どもの権利についてもっと関心や知識を持つ必要があります。

また、「こども基本法」では、こども(※2)には意見を言う権利があり、その意見を尊重し、政策に反映させるものと定めています。子どもの意見を聞くための仕組みや環境が整えば、子どもたちは声を上げやすくなり、いじめの防止にもつながります。

※1 国連で1989年に採択され、日本は1994年に守ることを約束しました。前文と54条からなり、18歳未満を「子ども」として対象にしています。

※2 「こども基本法」では、心身の発達の過程にある者を「こども」と表現し、対象としています。

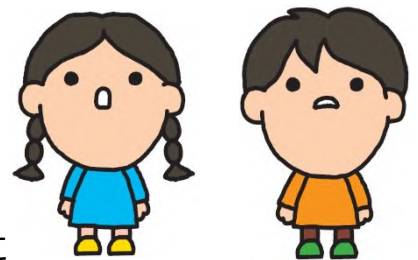
「聞くこと」と「聞いてもらうこと」

こんな経験はありませんか。心に抱えたモヤモヤを友人に打ち明けたら、「わかる、それは大変やね」とうなずいてくれ、気持ちが楽になったこと。これは、カタルシス効果と呼ばれ、マイナスの感情を口にするすることで、苦痛が和らげられ心が軽くなるという現象です。

私たちの日常は、人の話を「聞くこと」と「聞いてもらうこと」がうまく循環することで、ずいぶん穏やかで優しいものになります。そんな好循環の中で、子どものいじめ予防や相談、解消にむけた取組の効果が高まるのです。

聞くことは、受け止めること

子どもたちにとって、日々の生活の中で過度に気を遣い、様々な不安や悩み、疲れやストレスとなっているのが、友だち、先生、親などとの人間関係です。「周りの人



どう思われているのか不安」、「人と比べてしまってつらい」、「グループから離れたら仲間はずれにされる」、「大人は自分のことをわかってくれない」などです。

学研教育総合研究所の「小学生白書」(2021年)によれば、「友だちから嫌われないために、自分の意見を言わないことがあるか」との問いに対して、「よくある」・「ときどきある」と答えた小学生(全学年)の割合は6割を超えていました。他人の目線やまわりの空気に支配され、言いたいことが言えないのは精神的にしんどいことです。さらに、毎日と一緒に過ごす固定的な集団の中で、率直に意見や気持ちを言えない空気が広まれば、いじめが生まれやすくなり、いじめのエスカレートにもつながります。

感じ方や思うことは人それぞれです。話すことを通じてお互いの違いや良さが見えてくるのです。自由に意見が出せる機会や率直に話せる場、親身になって聞いてくれる人が増えていけば、きっと重苦しい空気は変わるでしょう。まわりの大人も、「もしもあの時、話を聞いてあげていたら・・・」と後悔しないために、普段から子どもの言葉に耳を傾けたり、身体や行動にあらわれるちょっとした変化に気づいたりしてあげましょう。

保護者から「うちの子は何も話してくれない」との悩みを聞くことがあります。一方で、「親が自分の話をちゃんと聞いてくれない」という子どもの不満も耳にします。実際、大人がスマホなど何かをしながら話を聞いていたり、「今は忙しいから…」とうまくタイミングが合わなかったりすることが結構あるようです。子どもにとって「ちゃんと聞いてもらう」というのは、自分の置かれた状況や気持ちを真剣に受け止めてもらうということなのです。

よく聞き、聞いてもらうために

子どもが心を開き、話をよく聞いてもらうには、“思ったことを言ってもいい”という関わり方や環境が必要です。そのためには、「ダメ出し(否定・非難)されない」、「失敗しても大丈夫」、「人と違っていい」など、【子どもの話をよく聞くための10項目】

安心感や信頼感を持てるような声かけ、働きかけが大切です。

その上で、子どもの話をよく聞くためのポイントを整理してみました(右の表)。

「どうしたの?」、「そうなの」、「それで…」、「どうしたいの?」など、子どもの成長の可能性を信じ、気持ちに寄り添いながら、対話を重ねていきましょう。

- いつも味方でいること、力になりたいことを伝えよう。
- 話を聞くための時間と場所、約束ごとを決めよう。
- ゆっくりとおだやかに問いかけよう。
- 話をさえぎったり、口出ししたりせずに最後まで聞こう。
- 話したくないことは、無理に聞き出さないこと。
- どんな気持ちかを聞き、子どもの感情を言葉にしよう。
- うなずきや相づちを交えながら、話に反応しよう。
- 沈黙に耐え、子どもの言葉を待とう。
- 返事には間を取り、結論は子どもに選択させよう。
- 最後に、「話してくれてありがとう」と伝えよう。

“いちばんゆうかなことば”は…

本当は助けてほしいのに、「恥ずかしい」、「心配かけたくない」、「怒られたくない」、「どうせ話しても…」などの気持ちから、助けを求められないでいる人がまわりにいませんか。

そんな人たちのために、「ぼく モグラ キツネ 馬」という絵本とその一節を紹介します。少年とモグラ、キツネ、馬の冒険と心の交流を美しいイラストとともに描いたアート絵本です。数々の名言が読む人の心を癒し、勇気づけてくれます。

旅に出た少年(ぼく)は最後に馬と出会い、会話をします。

“いままでにあなたがいったなかで、いちばんゆうかなことばは?” ぼくがたずねると、馬はこたえた。

“たすけて”

“いちばん強かったのはいつ?”

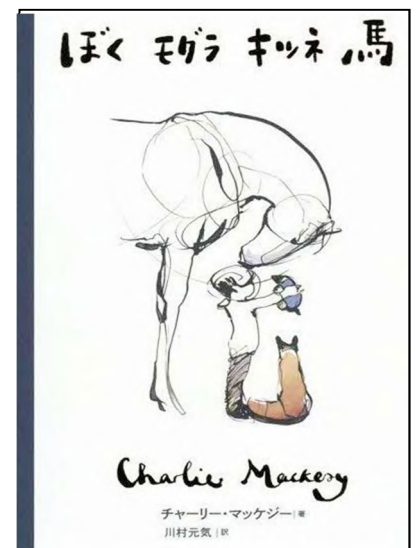
“弱さをみせることができたとき”

“たすけを求めることは、あきらめるのとはちがう”

馬はいった。

“あきらめないために、そうするんだ” (本文より引用)

“助けて”と言えることは、とても強くて、勇敢なことなのですね。きっと頼られた方もうれしく思うことでしょう。



作:チャーリー・マッケジー
訳:川村元気(かわむらげんき)
出版社:飛鳥新社

想像の世界を広げていきましょう

ロシアによるウクライナ軍事侵攻が始まってから一年あまり、今も予断を許さない状況です。その中で、昨年から注目を集めている「てぶくろ」という絵本があります。

「てぶくろ」は、ウクライナの民話をもとにした絵本です。日本では1965年に出版され、50年以上にわたって愛読されています。雪の中でおじいさんが落とした手袋の中に、いろいろな動物たちが次々と入っていくというなんとも不思議なお話です。

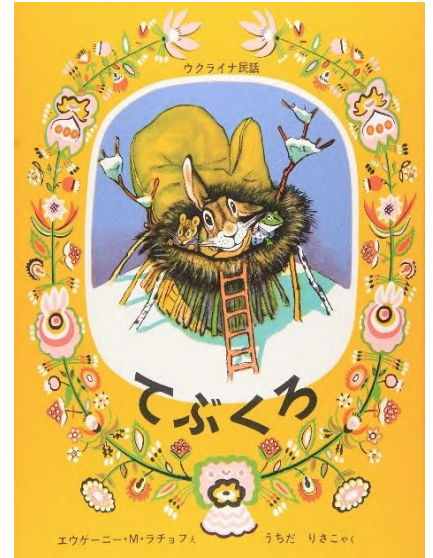
最初はネズミ、次はカエル、そしてウサギやキツネ、さらにオオカミやイノシシ、最後に大きなクマがやってきて、てぶくろは今にもはじけてしまいそうです。ハラハラ、ドキドキしながら絵本の世界に引き込まれていきます。

動物たちは、きまって「入れて」と呼びかけ、中にいる動物たちは声をそろえて「どうぞ」と答えます。そして仲間が加わるごとに、はしごやドア、窓がついたり、煙突からけむりが出たりと、てぶくろはまるで家のようになっていきます。いったいどうなっているのだろうと想像が膨らみます。

やがて片方のてぶくろがないことに気づいたおじいさんが戻ってきて、それを見つけた子犬が、「わんわん」と鳴きます。鳴き声にびっくりした動物たちは、いっせいにてぶくろから飛び出していきます。最後は、冷たい雪の上に何もなかったかのように一つのてぶくろがぽつんと残されているのです。

もしも、おじいさんが戻ってこなかったらどうなっていたのでしょうか。春になって、てぶくろが要らなくなったら、外での動物たちの関わりはどんなふうに進んでいくのでしょうか。いろいろと、親子で想像しながら伝え合うのも楽しいですね。

子どもたちの間では、“自覚のない”いじめが増えていると聞きます。いじめの理解とともに、他者の痛みへの想像力や共感力を養うための取組がますます求められています。



作:ウクライナ民話

絵:エウゲーニー・M・ラチョフ

訳:内田莉莎子(うちだりさこ)

出版社:福音館書店

「これっていじめ!？」
とかんじたら、
ひとりでなやまないで、
そうだんしてね!



三木市子どもいじめ防止センター

電話: 0794-82-8110

相談日 月曜日～金曜日

ijime_boshicenter@city.miki.lg.jp

